が請け負った。作物別では、牧草が137組織で最も多く、麦類が99、水稲が76組織。

各市町村（回答市町村数176）に組織の育成や運営についてアンケートも行い、農作業受委託のニーズが「ある」と回答した市町村は159（90.3％）と多かった。組織の充足状況への問いでは、「十分とは言えないが、ある程度は整っている」が81（46％）で、「整っていない」は60（34.1％）が回答した。農業者の農作業委託ニーズは、「増減していない」が50（32.3％）、「増えている」が44（28.4％）と分かれ、「把握していない」も53（34.2％）あった。

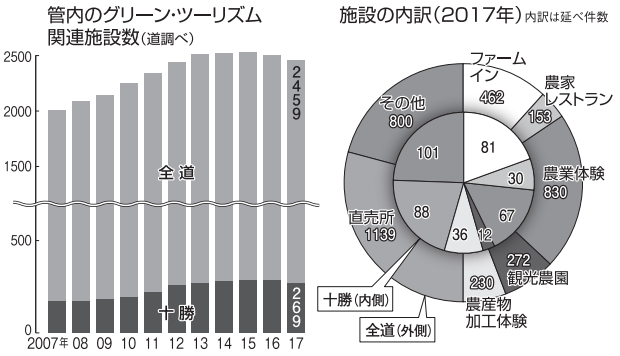
コントラクターへのニーズがある一方、事業者が追いついていない背景には、冬場に仕事がないため通年雇用できず人材が不足することや、受託面積が安定しないなどの理由から、経営面で厳しい現状がある。道農政部農業経営課は「農家の高齢化や大規模化で作業の受け皿が必要だが、多くの地域では組織数は横ばいになっている」とする。

十勝農協連は、労働力不足の解消や生産コストの削減に向けて、組織間で機械を共同利用するなど連携強化が必要だとする。

十勝地区農作業受委託事業協議会の林敬貴会長は「コントラクターは、単なる農作業の業者ではなく、『農業インフラ』と言うべき存在になっている。地域農業のためにＪＡや行政がしっかりと位置付け、体制をつくっていってほしい」と話している。

農業ガイド1123号　2017年９月９日
農業観光　十勝は269施設　2017年　前年比15減

道農政部は、道内のグリーンツーリズム関連施設の設置数（１月１日時点）をまとめた。14振興局のうち十勝は４番目に多い269施設があり、豊かな食材を背景に農家レストランが他地域に比べて多い傾向がある。全道では、インバウンド（訪日外国人旅行者）の増加や学校の修学旅行のニーズがある一方で、運営する農家の高齢化などで施設数は横ばいから減少傾向にある。



農家が運営する宿泊施設や農村景観を観光資源にしたグリーンツーリズムを進めるため、道が毎年、市町村を通じて地域の状況を調べている。2017年の全道は2459施設で前年から42施設減った。振興局別で最も多いのは空知管内の540施設（前年比16施設減）。十勝の269施設は前年より15施設減った。

高齢化で廃業も

全道では13年以降、施設数は2500台あったが、今回の調査では下回った。道によると、グリーンツーリズムが注目され出した10～20年前に宿泊施設や観光農園などを始めた世代が、高齢化で廃業するケースが目立つという。

振興局別では、修学旅行の受け入れが盛んな空知で、農家が運営する宿泊施設「ファームイン」の数が多い。札幌に近い石狩や後志などは、直売所や観光農園が多い傾向がある。十勝で多いのは、直売所の88施設（前年同数）、ファームインの81施設（13施設減）、農業体験の67施設（３施設減）の順番。農家が自ら育てた農作物の料理を提供する農家レストランは30施設あり、14振興局では最も多い。食材に恵まれていることや、営農規模が大きくて経営的な体力がある農家が多いことが背景に考えられる。

外国人旅行客には北海道の農村部で農業を体験して食を楽しむニーズがあり、修学旅行先としても根強い人気が続いている。農林水産省も「農泊」の取り組みを進めていて、道は受け入れる施設の減少の実態についてさらに調べていく方針。一方、受け入れのモデルとなる地域を応援する考えで、「農村の資源をいかに観光に結び付けるかがキーワード。自然や農業の体験をパッケージにして提供できる地域を支援していきたい」（農村設計課）としている。